

大学院夏季入試説明会

フランス語フランス専門分野を受験する予定の皆さん

○各専門分野の入試科目の説明

入試では、フランス語文献（作品・批評）の基本的読解力、フランス語で自分の考えを表現する能力、フランス語文法やフランス文学史に関する基本的知識が問われる。そのなかでも最も重要なのは読解能力である。

○各専門分野の最近数年間の（受験者数と）合格者数

修士 2016年度：受験者 15、最終合格者 5
2017年度：受験者 15、最終合格者 5
2018年度：夏季受験者 2、最終合格者 0
 冬季受験者 8、最終合格者 4
2019年度：夏季受験者 6、最終合格者 2
 冬季受験者 15、最終合格者 5
2020年度：夏季受験者 6、最終合格者 3
 冬季受験者 9、最終合格者 4

○各専門分野のアドミッション・ポリシー

《テキストとの対決》

文学研究の知識は絶えずテキストと対決することにおいてしか成り立たない。それは知識として整理できないものであり、どこまで深くどれだけ多様な視点から解釈を展開できるかに応じて更新されてゆく経験である。最近「解釈」という言葉に貧しい意味しか認めない風潮がある。だが、解釈とは単にフランス語と日本語を一義的に対応させる行為ではなく、どういう枠組みで対象となるテキストを捕らえるのか、テキストの中の何が問題と感じられるのか、その問題を解明するにはどのような資料体を読まなければならないか等々、問題意識に応じてさまざまな知識と作業を要求する実践である。

《論を立てることの重要性》

かりにフランス語がよく読めても、問題を見出せず論文が書けないのでは困る。構成力や文章力も不可欠な能力である。ただし、文学研究であるからには、具体的表現を無視して抽象的な議論を展開したり、自分の思想を表現するために作品を利用したり、といったやり方は許容されない。あくまでも対象作品に即し、テキストの読解から出発して論を立てることが重要である。

《幅広い興味を》

大学院ではある特定の作家、時代、テーマだけでなく、同時代の文学、文学と社会との関わりへと視野を広げること、さらには自分の専門と隔たった時代の文学にも広く関心を持ってフランス文学全体を見渡せるような展望を身につけることが求められる。それは研究を進める上でも重要なことであり、また将来教職に就いた場合にも求められる能力である。

○各専門分野の教員紹介

塚本昌則（フランス近代文学）

専門は、フランスの20世紀文学。とりわけポール・ヴァレリーを中心に、フランス近代文学を《詩学》（制作学）の観点から研究している。《詩学》とは、ジャンルとしての「詩」ではなく、テキストが産みだされる時に働くさまざまな力、矛盾、危機を解明しようとする研究である。また、言葉とイメージとの関係にも興味があり、夢、絵画、写真といったイメージの多様な現れを、フランス近現代の作家たちがどのように言語化しようとしたのかも追求している。これらの研究を通して、《近代》という時代の特徴を捉えることを目指している。

王寺賢太（フランス近世思想史）

18世紀後半、いわゆる「啓蒙の時代」のフランスと西欧における歴史叙述と政治=経済思想の交錯を主たる研究対象とし、モンテスキュー、ヴォルテール、ルソー、レナル／ディドロ、ケネーなどのテキストの読解に取り組んでいる。近年では、所有権と労働を基礎とする政治的主体の構想とそれに伴う新たな政治・経済・社会制度の要求を、18世紀における西欧が経験した「世界像」の変動に即して理解することに力を注いでいる。

これとは別に、マキアヴェッリからカントにいたる西欧近世の思想家たちを、<1968年>とともに現れた現代フランス・西欧の思想家たちがいかに読み、どう問題化してきたかを検討する仕事も続けている。総じて、資本主義的近代の生成とそのリミットを、人文学の立場から問い直すことを志している。

塩塚秀一郎（フランス近現代文学）

フランスの実験文学集団ウリボとりわけレーモン・クノーやジョルジュ・ペレックの研究に取り組み、制約のもとでの創作が芸術と呼ぶに足る作品を生み出す過程、あるいは自伝的要素と創造の関係、といった問題について分析している。近年は「都市の日常をめぐる思索者」というペレックの重要な一面がもつ意義を解明し、同時にフランソワ・ボンなど、現代フランス文学への影響をも含めて包括的に論じることを目指している。また、「空間」、「記憶」、「日常」、「遊び」など、コンセプチュアル・アートとの関連において、現代の文学的試みを捉えることにも関心を持っている。

マリアヌ・シモン＝及川（テキストとイメージ研究）

専門は、フランスと日本におけるテキストとイメージ研究。テキストとイメージ研究とは、絵画に関するテキスト、テキストからインスピレーションを得た絵画(イメージ)、イメージ化したテキスト、さらにタイポグラフィや本の挿絵なども研究対象としている。その中で特に絵画に関するテキストとイメージ化されたテキストに興味を持ち、ビジュアル・ポエトリー(視覚詩)、文字絵などを研究している。フランスだけでなく、日本の作品も研究しているから、その意味では純粋なフランス文学の分野というよりも、日本とフランス、テキストとイメージという二重の比較研究になる。

○修士修了者の就職状況の説明

《修士課程の位置づけと修了後の就職》

修士課程は基本的に学士の延長と位置づけられ、もう少し時間をかけてフランス文学を学びより高度な研究方法を身につけたいと希望する学生に勧める。この課程は必ずしも研究者の道に進むことを意味しない。人によっては、学部後期過程（3，4年生）の補完でもありうる。修士修了後の一般企業への就職を考えてもよい。実際に近年、半数近くは修士修了後、出版社や役所などに就職している。

《博士課程進学》

博士への進学は基本的に研究者志望を意味し、一般就職の可能性はかなり限定される。自主ゼミや学会発表を通じて研究を深め、課程博士論文の完成を目指す。伝統的に博士課程在籍中に留学してフランスで博士学位を取得する学生が多い。

○最近の研究室による研究公開活動（シンポジウムや講演会など）

仏文研究室では毎年数名の外国人研究者を招聘し、講演会・セミナー・学生の発表にコメントをつけてもらうレビューなどを行なっている。近年では、ラマルチーヌやペレックの研究者が講演を行った他、詩人と映画をめぐるコロックやヴァレリーとメルロ＝ポンティをめぐるコロックなどが開催された。